

#### 4. 特別セッション 50年後の国づくりに向け ～感想と今後の検討のお願い～ 画期的な企画、でも周知不足

平成14年度土木学会全国大会は、“21世紀のクオリティ・オブ・ライフをめざして”とし、特別講演会、全体討論会が行われた。これらと匹敵する程に重要な特別セッションが、人目をあまり引かずに9月25日、26日に開催された。

実は、私はその存在を知らずに居た。26日、幾つか聞いておきたい論文発表が重なっていた。そのため、私はセッションの途中である会場を抜け出し、目的の会場を確認していた。その時、偶然にも特別セッションの論文名を読み、驚いた。“あの、武部健一先生が、講演をされる”、これは、聞き逃してはなるものかと思い、特別セッション会場に向かった。会場は、若者が見あたらず、年配者が多い状況であった。

元駐米公使の岡崎久彦氏は、読売新聞（H14.8.26）において次の様なコメントを記載している。

「今後1週間の国際情勢を予知する最も地道な正攻法は、過去1ヶ月の情勢の流れをしっかりと把握しておく事である。一ヶ月先なら、過去1年間の流れ、半年先ならば過去10年間のながれである。それは、相当な経験と労力と洞察力を要する作業である。ここで論じる数十年先の見通しとなると、数世紀遡らねばならない。ところが、ここまでの長期となると、物事の枝葉末節は落ちて大局だけになるのでかえってわかりやすくなる。」

この言葉を借りるならば、21世紀、50年後を語るには、やはり、この50年、何を経験してきたかをまず、整理する必要があるものと思う。その意味で、多くの経験豊富な論客の意見に我々は耳を傾けることも必要であったように感じる。今回の企画は、十分な宣伝があれば、多くの参加者がこの画期的な企画に気づき参加され、これが実現したものと思う。

“知見を聞く”事も必要では？

本大会の特別講演会では、「国民が見える、判る土木技術、判ってもらえる土木技術が求められている。さらに厳しく“土木は死語”、自然と共生する技術、市民が参加する技術」と講演者が話された。今、土木学会全国大会は、修士の研究成果の発表場となった感が否めない。確かに、技術に関して研究し、極めていくことも重要であるが、これまで蓄積された研究・技術からの経験を整理し得ていない。ひょっとすると、「顔が見えない、判ってもらえる土木技術」のための方策の一つに、研究・技術からの経験の蓄積があるものと思う。と考えるのであれば、多くの知見をじっくりと聞く、このような発想があっても良いのではないかと私は考えます。

最後のセッションの司会者中村英夫教授は、「50年後

活躍されている人の質問を歓迎したい」とフロアへ注文を出した。私は、これを教授が「若者が知見を引き継いでほしい」と思っていることと解釈している。

先にも書いたよう、21世紀に活躍する若者の多くの参加を得て、蓄積された知見をさらに醸成されることが必要であり、その試みがこの特別セッションと私は受け止めている。

特別セッション参加者は意欲的

1925年生まれの武部先生は、「私が、論文を書いたから50年経った、その50年を10+30+10で見ている。」と言い、「50年を経ると文化遺産になる。それは、広島原爆ドームが被爆以来50年で世界遺産となったことから言える。」と話され、50年前を振り返ることや、50年間の知見を伝える事が重要であると言われたものと私は解釈した。

さらに、講演者からは、「若者の査読を受けなくて論文を書くことは楽しい」、「今回限りの企画か？」の発言も合った。講演者はフェローであり、別名「フェロー・セッション」であることは、確かであろう。フェローは、これまで蓄積されてきた知見を若者と議論し共有することを望んでいるものと、会場で感じた。加えて、司会者の五十嵐教授はこのセッションの意義を受け止め、講演者の紹介や、フロアとの議論が活発になるよう大いに気配りをされていたことも印象深い。よって、私が聞いていたセッションでの雰囲気は、司会者、講演者さらに参加されたフロアも含め、特別セッション参加者全体が、この企画の継続を願っていたようである。

今後に向けて

フェローの意気込み、知見を若手に伝授することを考えるなら、今後のこのような企画の継続に関する検討が必要と思う。しかし、毎回、同じような企画では、すぐにマンネリとなるものと思う。フェローと若手の議論を引き出すこと、土木技術の社会性を考えると、一般市民とフェローとの議論等の検討を必要であろう。多くの若手が参加出来るようにするには、論文発表時間を避けた研究討論会的な仕掛けや、学生交流会の前座的なイベント等も考えられる。テーマ的には、最上級技術者分野ごとに検討することも考えられ、ぜひ、次回の土木学会全国大会企画班の検討をお願いしたい。

（浦田康滋、(株)ドーコン）